

佛教大学における英語教育について

—— TOEIC IP テストとアンケート結果の分析 ——

松 本 真 治

1. はじめに

今日の国際化社会においては、英語がコミュニケーション・ツールとして必要だという認識がなされていることは言うまでもない (Cf. Fujita 2002: 57)。このような状況にあって、大学における英語教育も自ずとその方向性を修正してゆかなければならないし、本学もまたやはりその例に漏れない。コミュニケーション能力養成を英語教育のプログラムに組み込むにあたっては、まず、学生の英語コミュニケーション能力を客観的に把握しておかなければならない。今回、本学でも試験的な試みであるが、はじめて TOEIC IP テストを実施することができた。また、この試験と同時に、英語に関する簡単なアンケート調査も行った。本論では、TOEIC IP テストとアンケート調査の結果を分析し、佛教大学における英語教育のあり方を検討する。

2. TOEIC IP テストの実施概要

2.1 実施経緯

これまで本学では「前提学力調査」という形で、入学時に「英語」も含めた学力調査を行ってきた。しかしながら、「英語」単独に関する精度の高いデータ収集を行ってこなかった。そこで、試験的に在学生の英語能力に関する調査を実施し、今後の英語教育の改善に役立てることにした。

今回使用したテストは TOEIC IP [= Institutional Program] テストである。TOEIC テストを採用した理由は、その評価範囲は10点から990点で、初級から

上級まで幅広く受験者のコミュニケーション能力を測定することが可能だからである。英語教師としての経験的なイメージから判断すると、TOEICではなく、初中級者を対象にした TOEIC Bridge テストの方が本学の学生の英語能力を測定するには相応しいかもしれないと考えたが、中級・上級の学生の実態も調べるために TOEIC テストを採用することにした。また、教学的な側面だけではなく、学生の就職活動支援にもつながるとの考えからも、TOEIC Bridgeではなく、TOEIC テストを選択した。実際、試験の実施運営は就職部キャリア開発室によって行われた。

2.2 受験者

受験者に関しては、試験の実施であったために、予算的にも200名を受験対象者とした。この200名の選抜方式であるが、文学部英語英米文学科2回生、および、就職部主催の就職講座受講者を中心に募集することにした。英語英米文学科2回生はその大半が、3回生時に、新設されたコミュニケーション・コース（第一期生）に進むことを希望している。この二つの集団以外では、数名の教員がそれぞれの担当クラスで受験者を募ることにした。

2002年12月13日および14日の二日間にわたり、同一問題で計3回の試験を行い、合計169名の学生が受験した。その内訳は以下のとおりである（表1）。

表1. 受験者内訳

学 科	回 生	受験者数
仏教学科	3	1
史学科	2	1
史学科	3	5
国文学科	3	2
英語英米文学科	1	29
英語英米文学科	2	45
英文学科	3	28
英文学科	4	5
教育学科	2	14
教育学科	3	1

教育学科	4	1
生涯学習学科	2	12
生涯学習学科	3	9
生涯学習学科	4	2
社会学科	1	2
社会学科	3	4
応用社会学科	2	2
応用社会学科	3	1
社会福祉学科	3	1
社会福祉学科	4	1
大学院	—	3

※「英文学科」は2001年に「英語英米文学科」と名称変更

本論においては、調査対象を学部生に限っているため、2002年12月13日および14日の両日の受験者のうち、大学院生3名を除いた166名のスコアをもとに論を進めることにする。

3. TOEIC IP テストの結果

3.1 受験者全体

受験者166名全体の結果は以下のとおりであった。成績分布に関しては別表Aを参照していただきたい。

表2. 全体（受験者数166名）

平均点	353.7点
（リスニング平均点	202.7点）
（リーディング平均点	151.1点）
最高点	905点
最低点	165点
中央値	345.0点
標準偏差	99.6

TOEIC のスコア診断の目安として、コミュニケーション能力がスコアによ

って5つのレベルに分類されている。TOEIC 運営委員会発行の『TOEIC 公式ガイド & 問題集』（2000：17）より引用しておこう。

レベル A（990～860）：Non-Native として十分なコミュニケーションができる。

レベル B（860～730）：どんな状況でも適切なコミュニケーションができる素地を備えている。

レベル C（730～470）：日常生活のニーズを充足し、限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる。

レベル D（470～220）：通常会話で最低限のコミュニケーションができる。

レベル E（220～10）：コミュニケーションができるまでに至っていない。

この分類に今回の試験結果をあてはめると、表3のようになる。

表3. 全体のコミュニケーション能力レベル（ $n=166$ ）（人数）

レベル A	レベル B	レベル C	レベル D	レベル E
1	0	18	139	8
0.6%	0%	10.8%	83.7%	4.8%

3.2 回生別

回生別の結果は以下のとおりである（表4, 6, 8, 10）。それぞれの回生の成績分布は別表B～Eを参照していただきたい。また、TOEIC 運営委員会によるコミュニケーション能力の5つのレベルにも分類する（表5, 7, 9, 11）。

表4. 1回生（受験者数31名）

平均点	353.1点
（リスニング平均点	207.4点）
（リーディング平均点	145.7点）
最高点	500点
最低点	210点
中央値	350.0点
標準偏差	81.3

表5. 1回生のコミュニケーション能力レベル ($n=31$) (人数)

レベル A	レベル B	レベル C	レベル D	レベル E
0	0	4	26	1
0%	0%	12.9%	83.9%	3.2%

表6. 2回生 (受験者数74名)

平均点	338.6点
(リスニング平均点	191.4点)
(リーディング平均点	147.2点)
最高点	505点
最低点	195点
中央値	337.5点
標準偏差	69.6

表7. 2回生のコミュニケーション能力レベル ($n=74$) (人数)

レベル A	レベル B	レベル C	レベル D	レベル E
0	0	3	67	4
0%	0%	4.1%	90.5%	5.4%

表8. 3回生 (受験者数52名)

平均点	354.4点
(リスニング平均点	205.4点)
(リーディング平均点	149.0点)
最高点	665点
最低点	165点
中央値	342.5点
標準偏差	108.3

表9. 3回生のコミュニケーション能力レベル ($n=52$) (人数)

レベル A	レベル B	レベル C	レベル D	レベル E
0	0	7	42	3
0%	0%	13.5%	80.8%	5.8%

表10. 4 回生（受験者数 9 名）

平均点	476.7点
（リスニング平均点	263.3点）
（リーディング平均点	213.3点）
最高点	905点
最低点	230点
中央値	480.0点
標準偏差	188.3

表11. 4 回生のコミュニケーション能力レベル（ $n=9$ ）（人数）

レベル A	レベル B	レベル C	レベル D	レベル E
1	0	4	4	0
11.1%	0%	44.4%	44.4%	0%

4. TOEIC IP テストの結果分析

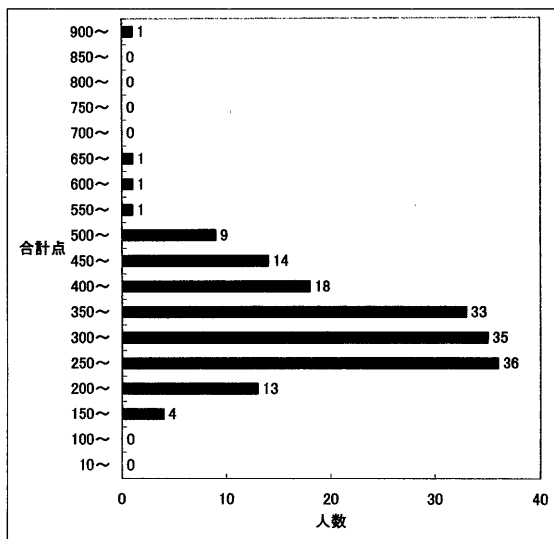
4.1 佛大生の英語能力の全体像：350点 $\pm\alpha$

表 1 からわかるように、今回の TOEIC IP テストの受験者には偏りがあり、平均的な学生を無作為に選んだわけではない。その意味では、このテスト結果によって佛大生の英語能力の全体像を明らかにすることができたとは言いがたいのだが、少なからず、佛大生の英語能力の現状を知ることができる。

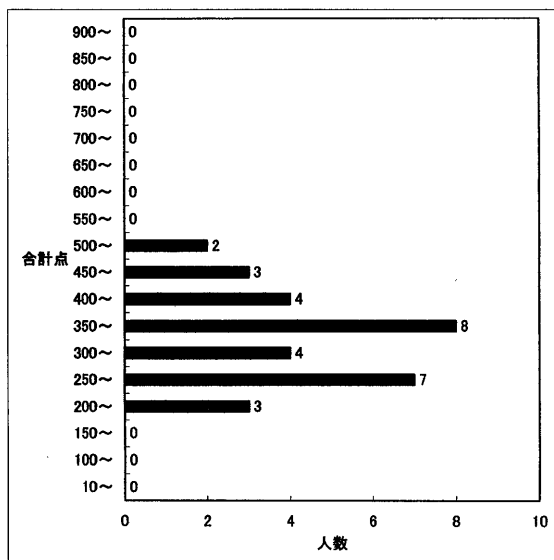
受験者全体の成績分布（別表 A）をながめてみると、はじめに気づくことは、200点から500点の範囲に大半の受験者（95.2%）が位置していることと、最高点（905点）だけが著しく傑出しているということである。この最高点を例外的存在と見なすと、分布の形は250点から400点の範囲を中心にした山を描き、その峰は低い点数の方にやや傾いているのだが、サンプル（受験者）に大きな偏りはないと考えてもよからう。

各回生の成績分布を見てゆくと、1 回生は200点から550点の範囲に収まっているが、250～300点と350～400点という二つの峰が見られる（別表 B）。平均点が353.1点、中央値は350.0点であり、1 回生の受験者は31名であったが、

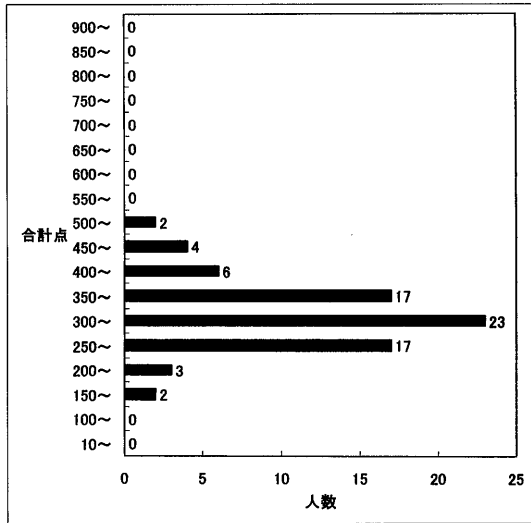
別表A. 受験生全体の成績分布（合計点）



別表B. 1回生の成績分布（合計点）



別表C. 2 回生の成績分布（合計点）

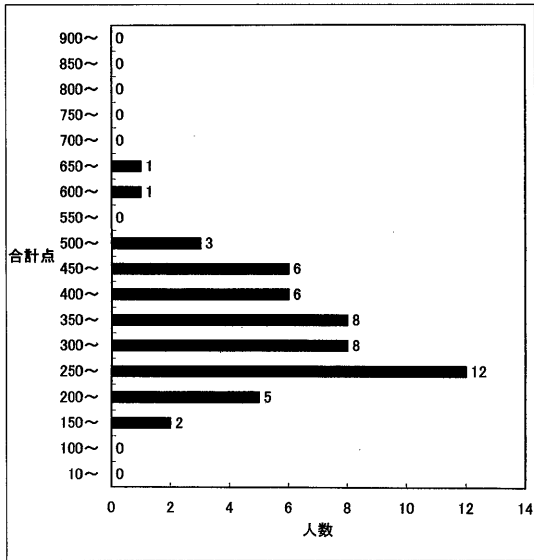


サンプルに偏りがあったようである。

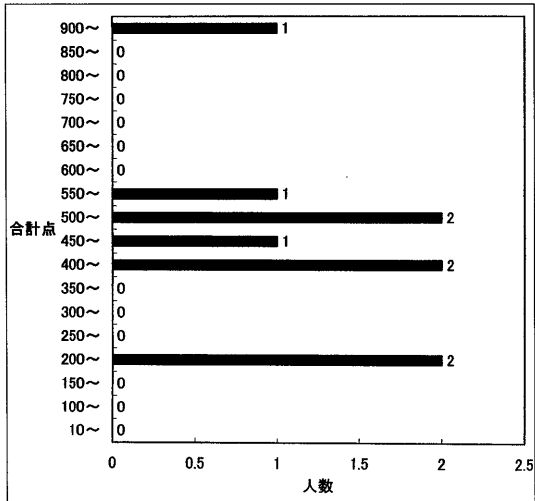
2 回生の成績分布は150点から550点の範囲に収まり、しかも300～350点を峰とした左右対称に近い山の形になっている（別表C）。実際、平均点と中央値もそれぞれ338.6点、337.5点となっている。2 回生のサンプルは最も多い数の74名であり、確かに250点から400点の間に分布が集中しているが（標準偏差69.6）、サンプルの偏りは他の回生と比べると、もっとも小さいものになっている。

3 回生の場合は、150点から700点の範囲で、250～300点を峰とし、平均点（354.4点）、中央値（342.5点）よりも低い点数の方へと傾いた山ができている（別表D）。250～300点の分布数が突出していることに加え、300～400点、400～500点のそれぞれのところで段ができており、滑らかな曲線を引くことができなくなっている。また600点台、650点台がそれぞれ一人ずつ中心から離れた形で存在することになっている。このようなことから、3 回生のサンプル数は52であったが、何らかの要因によるサンプルの偏りがあることは否定できないであろう。

別表D. 3 回生の成績分布（合計点）



別表E. 4 回生の成績分布（合計点）



4 回生の成績分布は言うまでもなく、他のものと比べると明らかに異なる形態をとっており、サンプルの偏りは明白である。最高点の905点もこの集団に含まれている上に、受験者数もわずか9名のために、平均点も476.7点と、他の回生と比べると100点以上も高く、標準偏差も100ポイント程度高い188.3となっている。

受験者全体の平均点は353.7点であり、最高点の905点を計算に入れなければ、全体の平均点は3ポイントほど下がり、350.4点となる（標準偏差90.1，中央値は同じ）。1，2，3回生の平均点はそれぞれ353.1点，338.6点，354.4点というように350点前後となっている。例外的な4回生のデータを斟酌すると、佛大生の英語能力の全体像として、まず TOEIC 350点という数字が浮かんでこよう。

次いで、佛大生全体の平均値を危険率5%（信頼度95%）で推定してみることにする。（Z推定）

- 1) 最高点905点を含めた場合の佛大生全体の推定値（ $=m_1$ ）

$$338.54 \leq m_1 \leq 368.93 \text{ (危険率 5 \%)}$$

- 2) 最高点905点を除いた場合の佛大生全体の推定値（ $=m_2$ ）

$$336.60 \leq m_2 \leq 364.19 \text{ (危険率 5 \%)}$$

同様に、各回生全体の平均値を推定してみる。（t推定）

- 3) 1回生全体の推定値（ $=m_3$ ）： $322.76 \leq m_3 \leq 383.37$ （危険率5%）

- 4) 2回生全体の推定値（ $=m_4$ ）： $322.35 \leq m_4 \leq 354.82$ （危険率5%）

- 5) 3回生全体の推定値（ $=m_5$ ）： $323.97 \leq m_5 \leq 384.88$ （危険率5%）

- 6) 4回生全体の推定値（ $=m_6$ ）： $323.17 \leq m_6 \leq 630.16$ （危険率5%）

サンプリングには多少の問題が含まれているかもしれないが、これらの推定値から判断しても、350点を一つの目安とすることができよう。ただ、若干気にかかる部分もまだある。それは、今回受験したそれぞれの回生の間に実力較差があるのかどうかという点である。4回生の受験者に関しては、他の回生と比べて極端にサンプル数が少ないので割愛するとして、1，2，3回生の間に

有意の差が認められるのかを、 t 検定（ウエルチ検定）で調べてみると次のような両側確率 $2p$ が得られる。1) 1回生と2回生：0.396, 2) 1回生と3回生：0.949, 3) 2回生と3回生：0.311, というように、危険率5%レベルの有意水準0.05よりも大きいので、この危険率レベルでは1, 2, 3回生の間に実力差があるとは言えない、つまり有意の差はないと結論できる。回生間の実力に有意差がないということは、別の意味で佛大の英語教育の現状を示すものであり、今後改善しなければならない点の一つとなるのだが、ここではその議論はさておき、回生間の実力差を考慮する必要はあまりないということが確認できた。

最後にもう一言つけ加えておくならば、今回の受験者166名のうち、英語英米文学科（英文学科）の学生が107名（64.5%）を占めており、また他学科からの受験者でも、英語が得意であるか、英語に興味があるか、もしくは何らかの形で英語の必要性を感じているか、といった学生である。従って、全学的な規模でTOEIC IPテストを実施した場合に、平均点が350点を下回るという可能性も十分考えられる。その結論は今後の広範囲な調査によって明らかにされるであろうが、今回のTOEIC IPテストによって、本学における英語力の判断基準の一つとして350点を定めることができると言える。

4.2 教学目标

TOEIC 350点を一つの基準にしたとして、そのレベルをどのように判断するかが次の問題である。TOEIC 運営委員会による、コミュニケーション能力の5つのレベルにあてはめると、レベルD（「通常会話での最低限のコミュニケーションができる」）になる。受験者全体、および1～3回生のコミュニケーション能力レベル（表3, 5, 7, 9）を見ても、実に約80パーセント以上の学生がレベルDに相当している。ではこの「レベルD」をどのように受け止めればよいのだろうか。「通常会話での最低限のコミュニケーションができる」のであるから、もうそれで英語の学習は十分だとも言えるし、その反対に、学習することはまだまだたくさんあるとも言える。結局は、何をもってその判断基準とするのかという問題に行き着くのだが、英語教師という立場からすれば、

レベルDでは不十分であり、少なくともレベルCにまで到達する学生を育てなければならないと考える。

英語教育の役目としては、一つには教養教育であり、もう一つには言語の習得である（もっとも、今日では語学教育とは第一義的には言語の習得と考えられることが多いのだが）。教養教育の面では確固たる目標を設定することは難しい。しかし、言語の習得という面では、たとえば、コミュニケーション能力に関しては TOEIC のレベル A とすることもできる。しかしながら、現実的には大学教育という限られた場において、すべての学生をレベル A にまで引き上げることは不可能であろう。本学における現実的な目標としてはレベル C が妥当なところであるが、それは単に、現状の学生の英語能力よりも一つ上のレベルだからという理由だけではない。学習者にその目標言語を習得させるだけではなく、教室を離れても自ら進んで目標言語を学習するという自立した学習者を育てあげることとも語学教育のねらいである。

そこでレベル D についての補足説明を見てみよう。

ゆっくり話してもらるか、繰り返しや言い換えをしてもらえば、簡単な会話は理解できる。

語彙・文法・構文ともに不十分なところは多いが、相手が Non-Native に特別な配慮をしてくれる場合には、意思疎通をはかることができる。

（『TOEIC 公式ガイド & 問題集』2000：17）

ここで言われる Non-Native に対する「特別な配慮」とは、いわゆるフォリナー・トーク（foreigner talk：ネイティブ・スピーカーが外国人に対して理解しやすいように話す話し方）のことであり、それは教室でのティーチャー・トーク（teacher talk：教師が学習者に対して理解しやすいように話す話し方）に相当する（Cf. Krashen & Terrell 1983: 34-35）。従って、簡単に言えば、このレベルの学習者にとっては、教室外よりも教室内の方がより相応しい学習環境ということになるのである（Cf. Krashen & Terrell 1983; Richard-Amato 1996: 20-36）。従って、レベル D のままでは、英語に対するよほどの強い興味・関心、または必要性がない限り、自主的に英語を学習することは困難であろう。

では、レベルCの補足説明も同様に引用しておこう。

通常会話であれば、要点を理解し、応答にも支障はない。複雑な場面における的確な対応や意思疎通になると、巧拙の差が見られる。

基本的な文法・構文は身につけており、表現力の不足はあっても、ともかく自己の意思を伝える語彙を備えている。（『TOEIC 公式ガイド & 問題集』2000：17）

このレベルであれば、学習者が教室での学習を終えた後でも、教室外で自ら英語学習を継続してゆくことが十分期待できるのである。英語圏の国に行く機会があれば、ある程度の期間滞在することによって、飛躍的に英語力を伸ばすことも可能であろう。この自立して学習できるレベルCが本学全体の目標として望ましいであろうし、それを実現させるためのコミュニケーション能力養成プログラムの確立が急務であろう。

4.3 キャリア開発

教学的な側面から英語能力の目標を検討したが、次に学生のキャリア開発という側面からも検討してみたい。英語教育と就職活動を結びつけるのは禁じ手のような感じもするのだが、現実的な社会の要請を考慮すれば、大学英語教育も単に教養教育に徹しているわけにもゆかない。企業が社員に対してある程度の英語力を求めているのは事実であるが、英語ができるだけでなく、「英語で何ができるか」が重要であるようだ（坂口2001：34-37）。「英語＝就職」という図式があるわけではないが、英語力が学生のキャリア開発に少しでもつながるのであれば、積極的に支援してゆくべきであろう。

企業が新入社員に期待するスコアとしては、1) 500点（30.4%）、2) 450点（18.2%）、3) 600点以上（17.6%）、4) 400点（14.9%）であるというデータがTOEIC 運営委員会によって示されている（Guide for Students 2002：20）。これらのスコアは概ねレベルC（470～730点）に到達すればクリアできるものであるが、今回のTOEIC IPテストでレベルC以上の受験者は全体で10.8%（18人）、450点以上のスコアの者は16.3%（27人）となっている。就職活動を行う

3 回生だけに限って見ると、450点以上の者は21.2%（11人）であり、佛大における一つの現状を示唆していると思われる。

本学における英語力と就職の関係を示すデータがあるわけではないので、これ以上の議論はできないが、一般的な意味で社会の求める人材を養成するということを考えれば、やはりレベルCの学生を輩出しなければならないであろう。

4.4 リスニングとリーディング

今回の TOEIC IP テストでは、全体的に、リスニング・セクションの得点がリーディング・セクションの得点より高いという傾向があるということも確認することができた（表12）。なお、TOEIC のリーディング・セクションは、長文読解問題（40問）だけではなく、文法・語彙問題（40問）と誤文訂正問題（20問）の合計100問から構成されている。文法問題が含まれているなら、なおさら、リーディング・セクションの得点がリスニング・セクションの得点よりも高くなるのではないか、というのが一般的な発想かもしれないが、事実是这样ではない。

表12. リスニング平均点とリーディング平均点

	全体 (<i>n</i> =166)	1 回生 (<i>n</i> =31)	2 回生 (<i>n</i> =74)	3 回生 (<i>n</i> =52)	4 回生 (<i>n</i> =9)
リスニング	202.7	207.4	191.4	205.4	263.3
リーディング	151.1	145.7	147.2	149.0	213.3
点 差	51.6	61.7	44.2	56.4	50.0

どの集団について見ても、多少の幅はあるにしろ、リスニングの得点がリーディングの得点よりも50ポイント前後高いことがわかる。佛大生全体では、危険率5%で、44.2~59.1点高いと推定される。もちろんリーディング・セクションの方でより高い点数をあげている受験者もいるが、数的には16.3%（27名）にすぎない。またこの集団におけるリスニングとリーディングの差は平均で-21.9点であり、合計点の平均は316.7点と、目安の350点を下回っている。

本学の学生の水準を考えた場合、リスニングとリーディングの両面において、

まだまだ鍛えなければならない余地が大いにある。コミュニケーション能力養成と言えば、リスニング訓練の方に意識が向かってしまうのだが、今回のデータから判断する限り、読むことを通じてのコミュニケーション能力養成にも気を配らなければならない。ただ、ここで気をつけておかなければならないことは、英文和訳の技術の習得や文型の学習とは異なる次元の学習が必要であるということだ。すなわち、与えられた長文の意味をすばやく把握する技術、語彙の知識、そして知識としての文法ではなく、語法の誤りを瞬時に見分けることのできる文法力が求められているのである。

4.5 長期海外留学

TOEIC IP テストにはアンケート欄があり、その一つに「主として英語を話す生活を送りながら海外に6ヶ月以上滞在した」経験を問うものがある。この質問に回答した163名（3名は未記入）のうち、わずかに3名だけが「Yes」と記入している。しかもこの3名が上位3位を占めることになった。

最高点の905点をマークしたのは、現在英文学科に4回生として在籍しているが、3回生終了後に1年間ニュージーランドへ語学留学し、2002年4月に復学した学生である。本人の談によると、TOEIC 公開テストで950点のスコアを取ったこともあるということだ。

ついで2番目のスコア665点の学生に関しては、個人的な面識がなく、データからの情報では、現在3回生として在籍し、1年から3年以内に6ヶ月以上の海外滞在を経験している。

3番目のスコア625点の学生であるが、カナダに1年間語学留学し、2002年9月より英文学科3回生として復学している。

因みに、905点の学生は、リスニングが475点でリーディングが430点、そして、625点の学生はリスニングが335点でリーディングが290点、というように、いずれもリスニングがリーディングを45点上回るといって、佛大における標準的なタイプと言える。しかしながら、665点の学生は明らかに異なっており、リスニングの400点に対し、リーディングは265点となっているのである。

これら上位3人の学生の存在は二つのことを意味しているように思われる。

一つは、佛大生の中にも秀でた英語能力を身につける学生がいることである。もう一つは、その反面として、上級レベルに達するためには留学が必須のものであるのかという問いである。もちろん外国語習得には、その目標言語が使われているところへ留学することが望ましいのであるが、では、長期留学経験なしに大学での英語教育を通じて、より高いレベルに到達することは不可能なのだろうか。今回のテストでは、長期留学経験者以外では、570点が最高点であった。2003年1月25日に27名を対象実施した小規模の TOEIC IP テストにおいては、長期留学経験者の受験はなく、最高点は595点であって、残念ながら600点を超える者はいなかった。

4.6 英検取得級との相関性

TOEIC IP の受験者データ欄には、英検の取得級を問う項目がある。その回答をもとに、TOEIC のスコアと英検取得級の相関性を見ておきたい (表13)。

表13. TOEIC スコアと英検取得級の相関性

	準1級	2級	準2級	3級	4級
人 数	1	14	36	15	2
平均点	905	458.2	356.3	314.7	222.5
最高点	—	535	520	400	250
最低点	—	345	200	215	195

一概に TOEIC と英検を比較することはできないのだが、一般的な相関表とのずれも見られる。TOEIC 905点であれば英検1級の範囲であるし、TOEIC 520点は英検2級レベルであろう。これとは反対に、英検2級、準2級、3級に対する TOEIC の平均点は低く、とりわけそれぞれの最低点は低すぎるとも言える。これらの原因としては、TOEIC と英検の試験の性格が異なるという点があげられるし、英検の取得時期としては過去1年以内と限定されているが、その間の学習成果が著しい場合もあるだろう。また、受験者がアンケートに答えるときに、過去1年という約束事を必ずしも忠実に守っているとは保証できない。

いずれにせよ、TOEIC の受験対策をした上で取得したスコアは、必ずしも真の英語力を示すものではないと言われている。どのような形の試験であれ、常に同じような水準を維持できることが重要である。決して TOEIC のためだけの英語教育ではないし、他の特定の検定試験のための英語教育でもないということとは忘れてはならない。

4.7 TOEIC テストの誤差

TOEIC テストの大きなメリットの一つとして、受験者の実力の変化がない限りは、ほぼ同じスコアとなるように設計されていることである。とは言うものの、数回受験した結果として、安定した実力が測定できるものである。先にも触れたが、2003年1月25日に、27名を対象にして前回とは異なる問題で TOEIC IP テストを実施した。このうち18名が前回の受験者であった。そこで2回のテスト結果を比べてみることにする（表14）。

表14. 2002年12月実施試験と2003年1月実施試験の比較（ $n=18$ ）

	平均点	リスニング 平均点	リーディング 平均点	最高点	最低点
2002年12月	361.4	209.4	151.9	530	165
2003年1月	417.0	246.1	170.8	595	275

わずか18名のサンプルであるが、明らかに合計点で50ポイントほどの伸びが見られる。対応2サンプル平均値検定（両側検定）を行うと、計算値は4.402となり、 t 分布表によると危険率5%で自由度17の値2.110よりも大きく、危険率5%レベルで2002年12月受験時よりも成績が上がっていることは確かである。二回目の試験実施までには一ヶ月程度しかなく、その間に受験者の実力が変化としたとも考えられない。むしろ、試験方法に対する慣れがその大きな要因ではないだろうか。二回の試験における最高点は、いずれも同じ学生によるものであった。一回目に165点であった学生は、二回目の試験では310点をマークしている。なお、受験者18名全員の成績が上がったわけではなく、3人（16.7%）の学生がスコアを落とすことになった。

5. アンケート

5.1 結果

I 就職講座を受講していますか。(受講したことがありますか。)

(有効回答数：165)

0. 受講していない（したことはない）	63.0%（104人）
1. TOEIC 対策講座	7.3%（12人）
2. 英語ステップUP講座	13.3%（22人）
3. 教員採用試験英語科専門対策講座	5.5%（9人）
4. 公務員試験対策講座	4.2%（7人）
5. その他の講座	6.7%（11人）

II 大学入試（他大学も含む）の際、英語を受験科目としましたか。

(有効回答数：162)

0. すべて英語で受験	45.1%（73人）
1. 一部英語で受験	27.2%（44人）
2. まったく英語では受験しなかった	27.8%（45人）

III 現在、共通科目の外国語はどの語種を主に履修していますか。

(有効回答数：164)

0. 英語	72.6%（119人）
1. 中国語	12.2%（20人）
2. ハンゲル	3.0%（5人）
3. ドイツ語	4.9%（8人）
4. フランス語	7.3%（12人）

IV 本学の外国語の卒業所要単位数（6～10単位）について

(有効回答数：164)

0. 少ない	6.7%（11人）
1. やや少ない	27.4%（45人）

2. 適当である	58.5%	(96人)
3. やや多い	4.9%	(8人)
4. 大変多い	2.4%	(4人)

V 本学の英語（共通科目）の授業内容の感想は。（Ⅳ以外で）

（有効回答数：164）

0. 適当である	16.5%	(27人)
1. リスニングを増やしてほしい	12.2%	(20人)
2. スピーキングを増やしてほしい	11.0%	(18人)
3. コミュニケーション能力中心にしてほしい	48.2%	(79人)
4. 読解中心にしてほしい	3.0%	(5人)
5. その他	9.1%	(15人)

VI 大学卒業時には、TOEIC 何点ぐらいを目標としたいですか。

（有効回答数：165）

0. 800点以上	4.8%	(8人)
1. 700点以上	20.0%	(33人)
2. 600点以上	21.2%	(35人)
3. 550点以上	17.6%	(29人)
4. 500点以上	21.8%	(36人)
5. 450点以上	10.9%	(18人)
6. その他	3.6%	(6人)

※質問項目の数が6つという制限があったために、このような形のアンケートになったことを付記しておく。

5.2 分析

5.2.1 「英語」選択と英語能力

質問項目のⅡとⅢを使って、「英語」を選択することと、英語能力の関係を見てみたい。入試タイプ別で、それぞれの集団の TOEIC IP テストの平均点を比較してみると、「すべて英語で受験」した集団の平均点が明らかに高くなっ

ている（表15）。「一部英語で受験」した集団もわずかではあるが、入試で英語未受験の集団よりもスコアが上になっている。なお、最高点の905点と第二位の665点の二人は、実は「まったく英語では受験しなかった」という集団に属している。

表15. 入試タイプ別の TOEIC IP テスト平均点（ $n=162$ ）

すべて英語で受験	一部英語で受験	まったく英語では 受験しなかった
381.7	336.5	328.4

次に、共通科目の外国語の選択語種による平均点の違いを見ることにする（表16）。「英語」を選択した集団の平均点が、他の語種を選択した集団の平均点よりも高い値を示しているが、「フランス語」選択の集団がほぼ同じ数値を記録するとは予想外であった。

表16. 選択語種別の TOEIC IP テスト平均点（ $n=164$ ）

英 語	中 国 語	ハンゲル	ドイツ語	フランス語
364.4	314.0	320.0	306.9	363.3

5.2.2 学生のニーズ

質問項目Ⅳ、Ⅴ、Ⅵより学生のニーズを知ることができるが、その答えは至って明白であろう。外国語の卒業所要単位数は現状のままでよいが、やや少ないと感じている学生のことも配慮して、自由科目としての単位数の上限を引き上げるべきであろう。「英語」の授業内容に関して言えば、今後はコミュニケーション能力養成を中心に展開すべきであろう。また、TOEIC の目標については、500点台から700点台に8割の学生の希望が集中しているが、この点数の範囲は、教学目標として設定したコミュニケーション能力のレベルC（470～730点）に相当するものである。

6. おわりに

今回の TOEIC IP テストの試験的实施によって、必ずしも絶対的なものではないが、佛大生の英語能力の現状を数値で把握することができた。教師の経験にもとづくイメージだけではなく、今回手に入れた客観的な資料と、教学的な観点、社会の要請、学生のニーズを考え合わせると、本学での英語教育においても、学生のコミュニケーション能力をレベル C にまで高める必要があると結論できる。もちろん、ここで言うコミュニケーション能力養成とは単なる英会話でもなければ、また古典的な英文和訳でもないのである。

今後の展開としては、今回の調査を基礎資料とし、さらに多くのデータを蓄積することにより、佛大生の英語能力の詳細な姿を捉えると同時に、その資料をもとに、効果的なコミュニケーション能力養成のプログラムを築き上げてゆくことになるのだが、それについては稿を改めたい。

Works Cited

- Fujita, Itoko. (2002). "English Language Education in Graduate Programs—A Key Strategy in the Era of Globalization." *JACET Bulletin* No.35: 57-62.
- Krashen, Stephen D. & Terrell, Tracy D. (1983). *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. Harlow, Essex: Pearson, 2000.
- Richard-Amato, Patricia A. (1996). *Making It Happen: Interaction in the Second Language Classroom, From Theory to Practice*. 2nd ed. White Plains NY: Pearson.
- 坂口さゆり. (2001). 「管理職は TOEIC 600 点—企業の英語力・大調査」 朝日新聞社『アエラ(AERA)』22 Oct.: 34-37.
- TOEIC 運営委員会. (2000). 『TOEIC 公式ガイド&問題集』2002.
- . (2002). *Guide for Students*.